

キャリア・ストーリー

Career Story

職業安定局
首席職業指導官室 次席職業指導官
松瀬 貴裕
(平成2年入省)

韓国の熱気に酔う — 韓国日本大使館二等書記官 (平成8年～)

韓国では1987年(昭和62年)の民主化以降、労働運動が急激に活発になっていきました。私が赴任した1996年(平成8年)当時は労働運動を抑え込む法改正等が断行されており、労働組合側の反発も激しさを増していた時期です。不安定な情勢の一方で、日本では体験できない活気を感じることができた3年間でした。

1997年(平成9年)にはアジア通貨危機が起こりました。韓国では、大財閥の倒産や国自体が債務不履行寸前となる等

社会全体が騒然とした状況の中で仕事をする毎日が続きました。当時は日本からも多くの要人が訪れ、支援策の協議などが繰り返し行われました。私がアテンドを務める中で印象に残った方は、大蔵省国際金融局長(当時、現日銀総裁)の黒田東彦さんです。とても気さくな方で、同行中はご自身の若い頃の事など楽しい話をしていただきました。韓国政府要人との協議は大変スリリングな内容で(中身は書きませんが)、まさに血湧き肉躍る思いで随行したのを覚えています。

現場で思いっきり仕事する — ハローワーク渋谷所長 (平成15年～)

第一線機関で勤務する醍醐味は、①自分のアイデアを実現できる、②利用者の反応をダイレクトに感じることができる、ということでしょう。私が赴任直後に職員に伝えたことは「失敗を恐れず何でも全力でやってみよう」ということでした。

サービスの質を向上させようと、利用者に優しいレイアウトを工夫したり、色んなイベントに取り組んだり、さらには一人一人の相談スキルを磨くために産業カウンセラー試験の勉強会を開催したりと、職員全員がまさしく一丸となって「サービス向上」に向かって頑張りました。このときの経験は、今でも私にとっての貴重な財産となっています。

当時、渋谷所には若者雇用対策のモデル的存在であった「ヤングハローワーク」という施設がありました。単にお金をかけるだけではなく、できることは手作りで備品などを工夫しましたし、なにより職員一人一人が施設を大事にしていましたので、とてもきれいな施設でした。「これがハローワーク？」と誰もが驚くような華やかさ・温かさがあったからでしょうか、マスコミや全国の自治体等からの取材や視察が絶えませんでした。ちなみに、若年者雇用対策として全国的に設置された「ジョブカフェ」は、このヤングハローワークを参考にして作られたものです。

現場を支える、現場から学ぶ — 次席職業指導官 (平成25年～)

首席職業指導官室は、第一線機関であるハローワークの職業紹介をレベルアップさせるための様々な業務指導を行っています。職業相談スキル向上のための指導を行うだけでなく、業務の効率化が図られるようなツールの開発も行っています。人間科学職の専門性が最も活かせる分野の1つと言ってもいいでしょう。

また、首席職業指導官室には全国のハローワークの情報が集まってきますので、その中からベストプラクティスといえる取組みを普及させていくのも重要な任務です。仕事の中で多くのことを学ぶことができるポジションであるともいえます。

都道府県労働局やハローワークはその地域における政策課題に対応することが求められています。私が北海道労働局で職業安定部長として勤務していた頃は、北海道庁や札幌市役所が雇用対策に大変熱心だったので、共同で若年者や就職困難者の就職を支援する施設を立ち上げるなど、一緒になって雇用対策を実施するたくさんの機会がありました。そうしたときに、物心両面で支えてくれたのが本省の担当者達です。現場のために、というマインドは、本省のどの部署にいても常に念頭に置いておかねばならないことだと考えています。

キャリア・ストーリー Career Story

ここ（職業安定行政）で仕事をするんだ — 大阪レディス・ハローワーク所長（平成3年～）

「大阪レディス・ハローワークの所長をしてもらいたい。」平成3年、人事院短期在外研究員としてアメリカで留学中だった私（当時30歳）は、1本の国際電話を受けました。

レディス・ハローワークは、現在のマザーズハローワークの前身で、北條雇用開発企画課長が係長時代に企画・新設したものです。女性の働きたいという声と女性労働力への期待を背景に、きめ細かな再就職支援メニューを揃え、働きたい女性を応援するというコンセプトを持った新しい安定所でした。前年に決まった「ハローワーク」という愛称を広めて、安定所のイメージアップを図ろうという考えもありました。

事前のPRのおかげで、初日からレディス・ハローワーク

は大変な賑わいでした。古くて暗い「職安」とは違うということで、マスコミもこぞって取り上げてくれました。

頻繁に取材を受けましたが、印象に残っているのは取材のあとのことです。職員の方と一緒に窓口で職業相談にあたり、これからについて話し合いました。再就職セミナーや広報紙、仕事のミニ解説など、一つ一つ実現していったことは忘れられません。

当時はまだ女性のポストが限られていたこともあり、これでいいのか悩んだこともあったのですが、ここでの仕事を通じて、心の底から、自分はここで仕事をするんだ、この人たちと一緒にやっていくんだ、という気持ちになりました。

全国の仲間とのつながりを実感 — 広報担当官（平成7年～）

平成7年、職業安定局の広報担当官となり、職員向け広報誌の編集にあたりました。

忘れられないのは、阪神・淡路大震災特集号です。震災半年後に、現地に行き、何日もかけて職員の方から話を聞きました。震災後は、職員の安否や被害状況の確認が終わるか終わらないうちから、兵庫労働局と厚生労働省の協議が始まりました。翌週には特別相談窓口が設置され、被災企業への助成金や震災で失業した方の失業給付期間延長など、緊急対策が次々に講じられました。全国のハローワークからも職員

が続々と応援に駆けつけ、激増する業務の処理に当たりました。非常事態を前にしたときの使命感の強さ、全国の仲間との連携の強さなど、話を聞いて、これは残さなければいけない、と思いました。

一方で、広報担当官は、計画的に業務を行いやすいポストで、この時に妊娠・出産を経験しました。子供の写真を撮るうちに、好きだったカメラにますます凝るようになり、何度か広報誌の表紙を飾ったのも懐かしい思い出です。

責任者の立場で — キャリア形成支援室長（平成23年～）

平成23年、キャリア形成支援室長となり、キャリア・コンサルティングの普及促進、ニート支援、厚生労働省のキャリア教育施策などの責任者という立場になりました。

キャリア・コンサルティングというのは、職業についての専門的な相談支援のことで、これに取り組むたくさんの方にお会いしました。また、NPO 法人の方が体当たりでニート支援に取り組む姿を目の当たりにしました。キャリア教育に取り組む先生方にもお会いしましたが、職業情報や働く上でのルールなど、厚生労働省がサポートすべきことは多いと思

いました。

室長として仕事をする中で感じたのは、出会いの大切さと、バランスを取ることの難しさです。現場を含め、いろいろな方に会える、これは大きな魅力です。また、労働行政の推進には、働く側、雇用する側双方の立場を踏まえた舵取りが必要ですが、責任者として、どういう者にどこまで支援するか、企業に何をどこまで求めるかなどについて考える中で、改めてバランスを取ることの難しさや大切さを学んだ気がします。



職業安定局
訓練受講者支援室長
浅野 浩美
（昭和58年入省）